

テュルゴー経済理論初期研究の再検討*

——A. ブショー「テュルゴー追悼演説」を手掛かりに——

中 川 辰 洋

“Faith, my friend, is hard to recognize
When you are travelling all alone in the night
Just look for the lights and . . .”
—— P. F. Sloan “From A Distance”

1.

この稿を起こした主な目標は、歴史学者のオーギュスト・ブショーが1846年9月10日、アカデミー・フランセーズで行った「テュルゴー追悼演説 (Éloge de Turgot)」を手掛かりに、アンヌ・ロベール・ジャック・テュルゴーという18世紀フランスを代表する思想家・政治家の人と功績、とりわけ“エコノミスト (économiste)”としてのテュルゴーの経済理論の初期研究をあらためて検討するところにある。

ブショー自らの認めるように、本来であれば、テュルゴーの没した直後にかような「追悼演説 (éloge)」¹⁾ がアカデミー・フランセーズで行われてもよかつ

* 本稿は、2018年度青山学院大学経済研究所海外出張助成によって、フランス国立図書館 (Bibliothèque nationale de France: BnF) において、2019年3月19日から25日にかけて行った18世紀フランス経済思想関連資料蒐集の成果の一部である。またBnFでは、オーギュスト・ブショーやアンリー・ボードリヤールの人と作品の検索のさい館員の方にご助力いただいた。記して感謝するしだいである。

1) “éloge”は後期ラテン語で墓碑銘を意味する“eulogium”を語源とするが、遑ればギリシャ語の“elegēios (死者を哀れむ)”や“elogium (褒め称える)”にたどり着くタームである。アカデミーは、1635年にルイ13世の宰相リシュリユーの承認を得て創設さ

たはずである。テュルゴーが晩年になって“小アカデミー (petite Académie)”の名で親しまれた碑文文芸アカデミー (Académie des Inscriptions et Belles Lettres)の副会長の要職を務めたことに思いを馳せれば、アカデミーが物故会員に贈る栄誉を手にする資格を、テュルゴー自身が備えていたからである。

それにまた、テュルゴーを論ずることの意味は、かれが同世代の人間たちから優れた哲学者、法学者、経済学者として認められたから、というにとどまらない。自らの職務に忠実な行政府の長——財務総監 (Contrôleur général des finances) ——として国民に献身し、新しい時代の幕開きに歓迎の意を表することのできた類い稀なる人物でもあった。アカデミーの会員にしてテュルゴーと交流のあったダランベールやヴォルテール、大親友のギヨーム＝クレティアン・ド・ラモワニオン・ド・マルゼルブらは証人として喜んで証言したのであろう。

ことほどさように、テュルゴーこそは、かれの生まれ育った18世紀の時代精神 (Zeitgeist) である啓蒙思想 (Les lumières) の申し子と称されると同時に、そのたゆまぬ思想的な営みの賜物である諸著作を作成・発表することによって、新しい時代を切り開いたパイオニアのひとりでもあった。とりわけ、17世紀初頭のアントワヌ・ド・モンクレティアンのネオロジスムである“経済学 (Économie politique/Économie politique)”の分野における貢献がそうである。やがて明らかにするように、ブショーはテュルゴーを「アダム・スミスの先駆者 (précurseur d'Adam Smith)」と呼んで高く評価しているが、このことをイギリスの経済学者アントニー・ブリュワーに倣って別言すれば、「古典経済学の創始者 (founder of Classical Economics)」と形容しても差支えないであろう。

それにもかかわらず、テュルゴー没後60年余が経過した19世紀中葉になっ

れて以来、物故会員への追悼演説 (éloge académique) を行うことを慣いとしてきた。わが国の頌徳文に相当する。ちなみに、時代が下って、“éloge”は他に賛辞、称賛、賛美の語義で使われるものの、故来死者の徳や功績をたたえ哀れむさいは、“賛”(または“讃”、“讃”)の漢字を用いることはない。のちにみるように、テュルゴーは生涯“メントール”と仰ぎ慕ったヴァンサン・ド・グルネーの死を悼んだ一文“Eloge de Vincent de Gournay”(1759年)を執筆しており、書誌家の津田内匠はこれを「ヴァンサン・ド・グルネー賛辞」(津田内匠訳『テュルゴ経済学著作集』岩波書店、1962年、所収)と訳出しているが明らかな誤りである。「ヴァンサン・ド・グルネー追悼」もしくは「ヴァンサン・ド・グルネー頌」と訳するのが好適であろう。

てアカデミーでテュルゴー追悼を行ったのは、ほかでもない、その死から8年が経過して勃発した大革命と戦争による混乱のためであった。実際、テュルゴーが亡くなってほでない18世紀末から19世紀初頭、かれに供された献辞や業績に対する評価は、友人ピエール＝サミュエル・デュボン、コンドルセ侯爵がそれぞれ1782年と86年に刊行したテュルゴーの伝記、アンドレ・モルレ神父の回想録、それにデュボンが校訂・編集した『テュルゴー氏全集 (*Euvres de Mr. Turgot*)』(1808年)ぐらいのものであった。

オーギュスト・ブショーのテュルゴー追悼演説は、大革命に端を発し半世紀の長きにわたる政治的、経済的、社会的混乱に終止符を打って政治的安定の回復、社会・経済の復興と開発が軌道に乗った時期になって行われたオマージュであったが、何よりもまず、聴衆をふかく感動せしめたのはブショーの明弁であった。奇しくも、ブショーが追悼演説を行った同じ年、自由主義経済学者のひとりアンリ・ボードリヤールがフランスの総合誌『両世界評論 (*Revue des Deux Mondes*)』にテュルゴーの追悼文を寄稿している。さらにこれらに遡ること2年前の1844年には、デュボンの衣鉢を継いだユジェーヌ・デールとイポリート・デュシャルが『テュルゴー全集 (*Euvres de Turgot*)』を刊行している。

これらはいずれもテュルゴーという人と作品、功績を正しく評価する学術研究のバイオニアというにふさわしい実質を備え、ために後進による研究の深化と充実が期待された。だが、そのような期待も空しく、1830年の革命によって誕生したルイ・フィリップの王政は、1848年2月パリを中心とする民衆運動と議会内の王政派と反王政派の政争——いわゆる2月革命によって倒壊の憂き目にあった。しかも、この革命によって誕生した第2共和政は短命に終わり、その後はナポレオン・ボナパルト(ナポレオン1世)の甥と称するルイ・ナポレオン・ボナパルトが政治的、社会的混乱に乗じて頭角を現し、ついには1852年に皇帝を僭称、帝政——第2帝政——を敷くなど、フランスは一再ならず政治・経済・社会の混乱に見舞われた。

そのナポレオン3世による第2帝政であるが、1870年にプロイセンとの戦い一敗地に塗れるまでつづき、プロテスタント系政治家のアドルフ・ティエール

を首班とするヴェルサイユの臨時政府に取って代わった。ところが、パリの民衆や社会主義者などはこれを不服として1871年3月に蜂起し自治政府——いわゆるパリ・コミュン（Commune de 1871）を樹立する。かたやティエールも負けじとばかりに、“大モルトケ”ことプロイセン参謀総長ヘルムート・フォン・モルトケらの与力を得て首都に上り、反乱軍をパリ市の東のはずれバール・ラシェーズで打ち破り念願の共和政を敷いた。第3共和政の誕生である。

この共和政は、1914年から4年の長きにわたる世界大戦を挟みながらも1930年代まで生き永ええ、フランスはまれに見る長期の政治的安定を謳歌することになる。本格的なテュルゴー研究が開始されたのも第3共和政治下の1880年代以降20世紀に入ってからであった。もちろん、1840年代のブショーやボードリヤールあるいはデール＝デュシャルらに負うところが大きく、かれらの功績なくして、ギュスターヴ・シェルが1913年から10年の歳月を費やして刊行した5巻組の『テュルゴー全集（*Œuvres de Turgot et documents le concernant*）』を頂点とする、テュルゴー研究は日の目を見なかったに違いない。

その意味からすれば、ブショーやボードリヤールのテュルゴーへのオマージュを手掛かりに、テュルゴーの社会思想や経済思想の初期研究を顧みることは有益と考えられる。とりわけ、テュルゴー研究が皆無のわが国にあってはそういつてよいのであるが、ブショーやボードリヤールにおけるテュルゴーの評価の際立った特徴は、テュルゴーの社会思想、経済思想をフランソワ・ケネーやフィジオクラート派との関連ではなく、ヴァンサン・ド・グルネーやかれのサークル（Cercle de Vincent de Gournay）との関連において評価したところにある。この点もまた、ケネーやフィジオクラート派に対して度しがたいまでにシンパシーを抱くわが国の研究状況への有力な反証と経済学の古典形成におけるテュルゴーの独自性を提示するものとする。

そこで以下、ブシューのテュルゴーへのオマージュの学問的功績を主として経済学の分野を中心に紹介することからはじめたいが、その前に、紙幅の都合で脚注を必要なものに限定し、参考文献、引用文献の注は割愛せざるをえなかった旨あらかじめお断りしておく。

2.

オーギュスト・ブショールが1846年9月10日にアカデミー・フランセーズで行った「テュルゴー追悼演説」は、1635年に時の宰相リシュリューの承認によってアカデミーが誕生して以来のふるい習慣に則ったもので、それ自体特別なことではない。しかし、ブショールのスピーチは聴衆を魅了し、この日行われた講演のなかで一等賞を獲得したといわれる。やがて明らかにするように、なるほどその価値を十分に有している。同じ年、アンリ・ボードリヤールが『両世界評論』に寄稿したテュルゴーへのオマージュがブショールの「追悼演説」に着想を得て作成されたというのもゆえなしとしない²⁾。

かくいうボードリヤールであるが、19世紀半ば以降フランス自由主義経済学の騎手としてアカデミズムのみならず新聞・雑誌や論壇などで幅広く活躍した人物である。さらに1853年にアカデミー・フランセーズで行った「ジャン・ボードダンとその時代 (*Jean Bodin et son temps*)」と題するスピーチによってアカデミーの“モンティヨン賞 (*Prix de Montillon*)”を受賞しているが、わが国ではカール・マルクスの大著『資本論 (*Das Kapital*)』第1部冒頭の章で一度だけその名が登場することをご記憶の読者もあろうかと思う³⁾。ところが、肝心のブ

2) ボードリヤールは「テュルゴー」の脚注において、ブショールの追悼演説の「抜粋をしか読むことができなかった。しかしながら、この作品の重要性に鑑みて、全文が公衆に供されるべきである」(Baudrillard [1846], p. 35) といっている。按ずるに、ボードリヤールもまた、ブショールの追悼演説を聴いた人間のひとりであったのかもしれない。なお、蛇足ながら、ここでいう“アンリ・ボードリヤール (Henri Baudrillard)”は、ポスト構造主義哲学者の“ジャン・ボードリヤール (Jean Baudrillard)”とは血のつながりのある間柄ではない。ふたりの苗字のつづりをご覧いただければ、ご理解いただけるものと思われる(ただし、日本語では発音はともに“ボードリヤール”である)。

3) マルクスは『資本論』第1部第1編「商品と貨幣」第1章「商品」の第4節「商品の物神崇拜的性格」のなかのロビンソン・クルーソーに関するくだりで、「ロビンソンとかれが自ら作り出した富を構成する諸物との間の関係の一切合財は、ここではきわめて単純かつ明白であって、ボードリヤール氏でも過度の精神的緊張を要することなく理解できるであろう」(Marx [1867], p. 611)。ただこのくだり、向坂逸郎訳『資本論』(岩波書店刊)はその限りではない。向坂訳では、われらが「ボードリヤール氏」の代わりに「M. ヴィルト氏」(向坂訳『資本論』第1巻、岩波書店、1967年、101ページ)なる人物が登場する。人名を検索するも、向坂のいわゆる「M. ヴィルト氏」と思しき人物にはお目にかかれなかった。読者諸賢ご高承のとおり、『資本論』

ショーについては、筆者がベルシー河岸のBnF（フランス国立図書館）で検索した限り、歴史家で『ポルトガルとその植民地の歴史（*Histoire du Portugal et de ses colonies*）』（1854年）と題する作品のほか何も発見できなかった。いってみれば、謎多き人物である。

しかしより大きな謎は、ブショーの「テュルゴー追悼演説」にしろ、ボードリヤールの「テュルゴー」論にしろ、筆者がこれまで蒐集したテュルゴーの研究書や論稿のなかで参考文献として紹介された事例がないことである。この点は、テュルゴーとかれを「誠実で思慮深い政治家」と形容したデイヴィッド・ヒュームとの交友関係を論じるとき、ジョン・ヒル・バートンがヒュームの甥と称する人物から譲り受けた膨大な資料や書簡などをもとに上梓した『デイヴィッド・ヒューム伝（*Life And Correspondence of David Hume*）』を参照する研究者がそれほど多くないことと似ているかもしれない。ヒュームなくして、同郷の後進アダム・スミスとテュルゴーとの邂逅を知ることにはできないにもかかわらず、である。いい換えるならば、バートンのヒューム伝やその補巻である『著名人諸氏のデイヴィッド・ヒューム宛て書簡集（*Letters of Eminent Persons Addressed to David Hume*）』は、テュルゴー研究の必読書といわなくてはならない。

話をオーギュスト・ブショーのテキストにもどそう。ブショーが、テュルゴーという人物と功績はもっと早い時期に、より高い評価をあたえられてしかるべきであったというのは、まったくそのとおりである。それにもかかわらず、かれの評価が遅れた最大の要因は、1789年の革命の勃発とその後の騒乱と喧騒であった。皮肉なことに、身分制議会（三部会）の廃止、信教の自由、言論・出版の自由、ギルド制の廃止と職業選択の自由、税制改革など、「革命」という手段

といわず、カール・マルクスおよびフィリードリヒ・エンゲルスの著作は今日、Marx-Engels Gesamtausgabe (MEGA)——1970年代以降刊行されている版は先の版と区別する意味もあって「新MEGA」と呼称——の発刊に至るまで数多くの版が出回っているが、本稿で典拠としたのはマルクス自身がジョゼフ・ロワの仏語訳に目を通して修正・加筆した「ドイツ語版とは異なる学問的価値を有する」フランス語版『資本論』第1部（*Le Capital: Livre premier*, 1867）である。著者自らが目を通して「ボードリヤール氏」と特定しているのだから、向坂がどう抗弁しようと、そして理由は定かではないせよ、間違っても「M. ヴィルト氏」であらうはずがない。

によって達成された一連の改革は、ルイ 16 世治下の 1774 年に財務総監——現代の総理大臣に相当——に就任したテュルゴーが構想したメニューであったが、革命のプロセスにおいてかれの名を一度たりとも耳にすることはなかった。

これが革命前のテュルゴーが財務総監の職にあった時代であれば、そうした
だんまり暗挑も理解できないではない。事実、貴族・大商人・教会勢力がテュルゴーの改革に猛反撥しただけでなく、ジュネーヴ出身の銀行家ジャック・ネッケルをはじめテュルゴーの任命した閣僚たちのなかにも逡巡するものもすくなくなかったからである。結局、2 年後の 1776 年 5 月、テュルゴーは国王によって財務総監の職を解かれた。いわゆる「テュルゴーの失脚 (disgrâce de Turgot) である⁴⁾。その後、ネッケルなどがテュルゴーの目指した改革を実現しようとするも貴族や教会などの反対勢力によって再三行く手を阻まれた。1789 年 5 月の三部会開催から 6 月 20 日「テニスコートの誓い」に至るプロセスは、平時における社会改革がもはや不可能であることの証であった。財務総監ネッケルの罷免から 3 日後の同年 7 月 14 日のバスティーユ監獄襲撃は起こるべくして起きた事件であった。

ここで特記すべきは初期の段階で革命を主導した人間たちの顔ぶれあり、ミラボー伯爵やラファイエット将軍などの立憲君主派、マルゼルブ、コンドルセ公爵、アンドレ・モルレ神父、ピエール＝サミュエル・デュポン、ジャック・ネッケルなど、その多くがテュルゴーの友人・知人かれを師と仰ぐ人間たちであった。そしてかれらが目指したのはうえて示したテュルゴーの改革メニューの実現であった。たしかに、やがて急進派が主導権を握り 1792 年に共和政を敷

4) テュルゴーの諸改革への不満や批判はすくなくなかったが、1775 年に開始されたアメリカ独立戦争における東部沿岸の英領 13 植民地の独立派支援活動も争点のひとつであった。すなわち、国王ルイ 16 世は七年戦争 (1756-63 年) の屈辱を雪ぎ、フランスの栄光回復の好機とみて植民地独立を支援すべきであるとかれの財務総監に強く迫った。テュルゴーが青年時代からアメリカ独立を時間の問題と考え、時が来れば支援する用意のあったことを国王が知っていたからである。これに対して、われらが財務総監は国王の意向を酌むどころか、反対に政府の長として特定の国に肩入れするのは政治的にこのましいとはいえず、あくまでも中立を保持すべきであると真っ向から反論した。このため、ルイ 16 世とかれの財務総監との確執と不和が生じ、これが最終的にテュルゴーの財務総監解任へと発展する遠因となった。なお、この点については、さしあたり Bouchot [1846], pp. 60-1 を参照されたい。

くに及んで、革命の急進化を嫌気した立憲君主派などの穏健派の追い落としや謀殺がはじまるものの、しかし急進革命派といえどもテュルゴー流の改革メニューのほとんどを継承し実現することに意を注いだといつてよかった。ただテュルゴーの名が急進革命派の口をついて出ることがなかった。ばかりか、コンドルセが獄死（急進派による毒殺との説あり）したほか、国王裁判でルイ16世の弁護を唯一買って出たマルゼルブとその一族が「反革命分子」と断罪され断頭台の露と消えたのちは、テュルゴーのという政治家の功績は完全に否定され、忘れ去られたかのようであった。

それどころか、『百科全書 (*Encyclopédie*)』の初期の数巻やジャン＝ジャック・ルソーの著作の発刊に多大の功のある啓蒙思想の保護者マルゼルブでさえ革命急進派の手で断頭台に送られたとすれば、かれの大親友で立憲君主制の支持を公言してはばかりことのなかったテュルゴーもまた「反革命」のレッテルを貼られ、ヒステリックな金切り声で「断頭台へ、断頭台へ」と叫ぶ“編み物女たち (*tricoteuses*)”に送られて革命広場——現在のコンコルド広場——で処刑されても不思議ではなかったろう。だが、それは「革命の頭脳」を落とす暴挙、大義のない恐怖政治 (*Terreur*) ——“テロリズム (*terrorisme*)”の語源といわれる——であり、急進派の暴走が嫌気され民衆の支持を失うのは時間の問題であった。

すなわち、共和暦Ⅱ年テルミドール7日 (1794年7月27日)、反急進派クーデターによって急進派の一斉逮捕、マキシミアン・ロバスピエールやサン・ジュストら指導部22人の処刑が行われた。いわゆる“テルミドールの反動 (*Réaction thermidorienne*)”である。こののち、執政官ナポレオン・ボナパルトが抬頭、やがて自らを皇帝ナポレオン1世と称して帝政を敷き、革命そのものを変質せしめた。だがナポレオンは1815年のワーテルロー戦いで敗北、帝政はわずか10年でその幕を下ろし、王政が復活する。

このように、テュルゴーは1776年の失脚このかた政治の表舞台でその名を刻むことはなかったが、かれの目指した政治・社会・経済の諸改革は、その後の大革命のメニューとして受け容れられ達成されるに至った。もしこれらの改革がテュルゴー内閣 (1774-6年) のもとですべて実施されたなら、大革命の勃発

を阻止できたであろうという言い分にも一理ある。別言すれば、テュルゴーの提起した諸改革をフランス史上未曾有の社会的コストを支払って達成し後世に引き継いだのである。はたしてそうであるとすれば、オーギュスト・ブショーのいうように、テュルゴーの思想・信条を論ずることは、かれの生きた18世紀という「ひとつの時代だけでなくわれわれの時代〔19世紀〕を正しく評価するメリットがある」⁵⁾ というのはまったく正しいといわなくてはなるまい。

ブショーはこの点くわしくのべていないけれども、およそ思想とは、それが政治思想であれ経済思想であれ、ある歴史的状況における政治的・経済的現実を映し解決をもとめている課題に対して、既存の考えや意見に満足せずに応えるかたちで形成されるものである。けだし、思想の中身をそれ自身として捉え、その価値や意義を正当に評価するためには、それがどのような現実的課題の解決を目指し、先行する諸思想の不備・欠陥をどのようにして克服するのかという問いへの配慮が必要不可欠となる。

ともあれ、こののちブショーは、テュルゴーが生まれる1727年から亡くなる81年までの約50年の生涯をその時代状況をふり返って解説するのであるが、ここでは紙幅の都合ですべてを紹介することはできない。ただのちの議論との関連でつぎのふたつの点を指摘しておきたい。そのひとつは、テュルゴーの思想や行動に影響を及ぼした18世紀フランスのエピステーメ (épistémè) ——多様な学問を成立させている学的認識体系また諸条件——であり、なかでもここで特記すべきことは当時の哲学のもつ思弁性と行動性である。つまり、フランス哲学のもつ高度の社会性が「経済学 (économie politique)」の誕生の一要素といつてよいかもしれない。

周知のように、近代哲学はルネ・デカルト、ニコラ・ド・マルブランシュ、サー・フランシス・ベーコン、バールーフ・デ・スピノザ、ゴットフリート・W. ライブニッツなどの功績に与るところ大であるが、18世紀フランスにあって、哲学は王家やローマ・カトリック教会に好意的でない思想の潮流と無関係ではなかった。いってみれば、“哲学者 (philosophe)” とは世の中の不平不満を

5) Bouchot [1846], p. 3.

声高に叫ぶ不逞の輩、反体制分子と同義であった。こうした反体制不満分子が社会を批判するとき、社会問題の一分枝として経済問題を避けて通ることはできなかった。哲学者たちのなかに経済事情の研究を旨とする手合いが現れるのはけだし時間の問題であった。

当時、経済問題に精通した人間たちは“エコノミスト (économiste)”と称され、いわゆる哲学者肌の人間ばかりでなく、聖職者、行政官や商人などのなかにも同輩をすくなく見出すことができた。かれらのなかから、実際に社会改革を目指す人物が輩出されるようになり、あまつさえ改革のための政策集団を立ち上げるものも現れた。ルイ 15 世の寵姫ポンパドゥール夫人の侍医にしてのちに国王の御典医となるフランソワ・ケネーを^グ^ル道師と仰ぐ集団——やがてピエール＝サミュエル・デュボンのネオロジスム“フィジオクラシー (Physiocracie)”の名称で一般的に知られるようになる——や、時の財務総監マショール・ダルヌーヴィルに請われて国際的商人から商務省の行政官に転じたヴァンサン・ド・グルネーのグループがその代表格といつてよい⁶⁾。

若きテュルゴーがケネーとグルネーの双方のサロンに顔を出していたことはよく知られているものの、こと経済学的思考についていえば、ケネーよりはむしろグルネーに多くを負っていた⁷⁾。事実、テュルゴーはグルネーの勧めで、地方各地の視察旅行に同行したほか、ドーバー海峡対岸のウェールズ出身の牧師にして経済問題に精通したジョサイア・タッカーの自由貿易に関する論文の仏

6) この点、詳細はさしあたり Meyssonier [2008] を参照されたい。また、中川 [2013] もあわせて参照されたい。

7) テュルゴーは 1766 年 2 月友人のデュボンに宛てた書簡のなかでこういつている。すなわち、「わたしはこれらふたりの人間 [グルネーとケネー] の弟子であったことを生涯の誉れとするものである」(Turgot [1766], p. 506)。しかし、5 年後の 1771 年 2 月に同じくデュボンに宛てた書簡では、「不幸にして、ふたりの巨匠 [ケネーとミラボー侯爵] は言語と文法 [中略] の分析に成果を出していません。これらを論ずるには、セクト主義 (esprit de secte) の忌み嫌う精神の空白状態からはじめなくてはなりません」(Turgot [1771], p. 474) といっている。ここでいう「セクト主義」とはフィジオクラート派の教義のことである。テュルゴーが先の書簡でケネーを評価したのは、グルネーと同様にケネーも「商業の自由と競争の原理を尊重していた」(Turgot [1766], p. 506) からであって、「経済表 (Tableau économique)」に象徴されるフィジオクラート派の教義に共鳴したからではなかった。

語訳を手がけたり、『商業一般の本性に関する論説 (*Essai sur la nature du commerce en général*)』のタイトルで日の目を見る、アイルランド出身でのちにフランス国籍を取得したりシャル・カンティヨンの論稿の出版に関与するなど、時の商務局長への傾倒が際立っている。テュルゴーがグルネーを“メントール”と呼び、かれの死に臨んで執筆した「ヴァンサン・ド・グルネー頌 (*Eloge de Vincent de Gournay*)」のページを繰れば、グルネーのテュルゴーへの学問的、思想的影響がいかに大きかったかを容易に知ることができる。

オーギュスト・ブショールならずとも、テュルゴーの先達としてケネーとグルネーの名を挙げることが慣いとなっている。ところが、後者の影響が前者のそれよりも強く大きかったことは、既述のように、グルネーの国内視察旅行に同行して地方経済を観察した経験が、のちにテュルゴーをして社会問題や経済問題への関心を高めるきっかけであったことをみても明らかであった。リモージュ地方長官、ひいては財務総監の職にあって考え行動するさい、けだしグルネーの視察旅行の経験が活かされていたといつてよいのであるが、その根底には庶民の生活を豊かにすることなくして国家の安寧はない、という信条があった。若きテュルゴーが目の当たりにしたフランス社会は、ケネーの有名なアフォリスム「農民貧すれば、王国貧す。王国貧すれば、国王貧す」そのものであったろう。

だが「貧する」のは、農民ばかりか、製造業の職人や労働者、商人やその従業員たちとて同じであった。テュルゴーが目指したのは、農業、工業、商業の振興と各分野に従事する人間たちが豊かで幸せに暮らすことであった。かれの高い志が“^{フィロゾフ}哲学者”ひいては“エコノミスト”への道を歩ませることになった——ブショールはそうに主張するのであるが、それはテュルゴーの生い立ちと深く関わっていたといわなくてはならない。これがいまひとつ考察すべきポイントである。

3.

オーギュスト・ブショールによると、テュルゴーの社会改革への志の強さは、

かれの生来の性格に由来する。すなわち、北欧神話の“トール神 (Thor-Got)”の末裔というノルマンディーの名門貴族のひとつであるテュルゴー家——累代の所領はノルマンディーのラントウイユ——は、名にし負う民の保護者の模範的市民たるべき教えや戒めを代々伝えてきた。パリ市商人頭 (現在のパリ市長職) ミシェル＝エティエンヌ・テュルゴーとマドレーヌ＝フランソワーズ・マルティノーの間に生を授かったわれわがアンヌ・ロベール・ジャックは、幼少の時分から祖先の伝統、美德、勇気、学問への敬意を学び、長じて思想家、行政官の道に足を踏み入れてもそうした教えや戒めを忘れることはなかった。

それはまた、テュルゴーという正義感にあふれ、慈愛心に満ちた誠実で思慮深い人物の自己形成を意味する一方、強い自立心を養うことになった。かれの“党派 (secte)”や“派閥 (clan)”を嫌う性格は生涯変わることがなかった。ケネーを師と仰ぐも、かれを神輿に担いだフィジオクラート派を「セクト主義 (esprit de secte)」と痛罵し、かれらから一步も二歩も距離を置いたのもそのためである。反面、グルネーはアルジャンソン侯爵のネオロジズムと伝えられる「自由放任 (Laissez-faire, laissez-passar)」に傾倒した人物らしく、開明的かつ自由主義的——とどの詰まり党派的でなかったこと——であったことが、テュルゴーをして“メントル”と称せしめた主因であった⁸⁾。

そうはいっても、そしてこれが「孤高の思想家 (penseur solitaire)」(ブショー)

8) 今日、グルネーの発案で日の目を見たりシャル・カンティヨン『商業論説』がプライス・メカニズムをはじめ経済学のほとんどの領域をカバーする「初の経済学の論文」(ウィリアム・S. ジェヴォンズ)であることに異を唱える研究者はいないと考えられるが、それでも久保田明光のように、フィジオクラシー成立直前の「過渡的重商主義者」と捉える研究者もいないではない。同様に、テュルゴーに「商業の自由と競争」を尊重することを教えたグルネーを過渡期の穏健な重商主義と見做す説と、自由主義的傾向の商人・経済学者とする説との間で論争があった。前者の代表格はアウグスト・オンケン、後者にギュスターヴ・シュルの名を挙げることができる。このほかにも、グルネーを「ケネーの思想に近い人物」という評価もあるが、ジル・ドスタレーは「自由主義のバイオニアかつ保護主義者」という見方をするなど、その評価はかならずしも定まっていない。それでも、グルネーが「開明的かつ自由主義的」で、「セクト主義」を嫌う人物であったといわれ、かれの主宰する政策集団を「グルネー・サークル (cercle de Gournay)」と称するゆえんである。以上、くわしくは、手塚 [1927]; 久保田 [1965 (1940)]; Meyssonier [2008]; Charles [2009]; Dostaler [2010a, 2010b]; 中川 [2013] を参照されたい。

テュルゴーのテュルゴーたるゆえんとするところであるが、ケネーやグルネーの思想を絶対視し、そこから一步も先に進まないということはなかった。ケネーが農業にのみ認めた「純生産物 (produit net)」論を一般化して商業や工業にも適用したこと、またグルネー譲りの新しい富の概念である「資本 (capital)」やその所有者「資本家 (capitaliste)」の導出に安住することなく、資本と資本家とが織りなす関係を基礎に人間社会——すなわち「商業社会 (société commerçante)」のありようを組織的に分析したことはその顕著な事例である⁹⁾。

この点、ケネーにしる、グルネーにしる、かれらの説く新しい学問が発展途上であって、いまだ完成の域に達していなかったことが、テュルゴーにとってさいわいした——というブショーの謂はまことにもっともといはなくてはならない¹⁰⁾。テュルゴーが1766年に執筆した『富の形成と分配に関する諸省察 (Réflexions sur la formation et la distribution des richesses)』(以下、『諸省察』と略記)は、そのたゆまぬ思想的営みの賜物であったであろう。

だが、テュルゴーの生涯で劃期をなす歴史的な名作の誕生を語るとき、決して

9) わが国で戦前からケネーとフィジオクラート派の教義を「重農主義」と称するのはアダム・スミスが『国富論』第4篇でこれを“農業システム (agricultural systems)”と呼びわったことに由来する。すなわち、この教義は「コルベールの重商主義に対する反動」として生まれた教義であり、土地の生産物が「すべての国の収入の源泉」と説くのは誤りであり、「不完全であるにもかかわらず、おそらくこれまでに政治経済学の問題について発表されたもののうちで、最も真理にせまったものである」(Smith [1776], pp. 627, 642. 訳 465, 474 ページ)。また、スミスはケネーの思想的バックボーンである自然法哲学や自然法秩序への理解を示していた。スミスのいわゆる「見えざる手 (an invisible hand)」は、フェルディナンド・ガリアーニの『貨幣論 (Della Moneta)』に見える“いと高きところの御手 (la suprema mano)”に影響されたものであるといえ、その「見えざる手」によって、みずからは意図してもいなかった一目的〔社会一般の利益の増進〕を促進することになった」(Smith [1776], p. 423. 訳 388 ページ)という説こそ、ケネー流の「自然法秩序」の受容であった。その意味からすれば、スミスこそは「ブリテン島における『フィジオクラート派の長男』」(中川 [2006/2007ii], 104 ページ)といえるかもしれない。

10) Bouchot [1846], p. 10. ブショーは別のところでこういつている。すなわち、テュルゴーは、純生産物、資本などケネーやグルネーの教義に理解を示すとはいいながらも、しかし「学問が確固不変でありつづけることはない。テュルゴーはさまざまな原理・原則を発展させ、〔かれ固有の〕言語〔と文法〕を生み出した」(Idem, p. 34)。ブショーによれば、テュルゴーの学問への姿勢もまた「セクト主義」を徹底して忌避するものであった。

忘れてならないことは、それが当時の清朝中国の繁栄とその原因究明という、いまひとつの目標をもっていたことである。諸賢ご高承のとおり、『諸省察』は、かの地のイエズス会がフランスに送ったふたりの華人留学生——名をそれぞれ高 (Ko) と楊 (Yang) という——にあたえた質問状「支那に関する諸問題 (Questions sur la Chine)」への、時のリモージュ地方長官の見解であり、そこでのかれの主たる目標は「〔西洋〕社会の現況と富の生産と分配に関する詳細な見取図」を描写するところにあった。

すなわち、オーギュスト・ブショーによれば、テュルゴーは当初、康熙帝、雍正帝、乾隆帝の3代の御代で頂点を極めた満州族出身の清王朝の計り知ることを得ない富の本性と諸原因の研究と、その成果のフランス王国への応用の可能性を模索していたのである。それゆえ、かれは『諸省察』を刊行して広く一般に知らしめることをのぞんでいなかったのである。だが、後述のように、ケネー——門の主将にしてテュルゴーの友人のピエール＝サミュエル・デュボンの強い勧めに根負けして1769年末から翌年のはじめにかけて、3回に分けてフィジオクラート派の機関雑誌『市民日誌 (Éphémérides du citoyen)』に掲載することとなる。

それはともかく、テュルゴーがここでも王国の民の繁栄に経済学が有効な学問であると考えていたことは間違いないところである。ことほどさように、『諸省察』に先立つ諸著作は、商業の起源、農村経済、大規模耕作と小規模耕作との比較、人間の生存条件の不平等、資本理論、貨幣の使用、付利の合法化といったトピックをテーマにしたものであり、かれの頭のなかでは、人間はいかに生きるべきか、いかにして豊かになれるかといった哲学的命題と経済問題とがつねに同居していたのである。

別言すれば、テュルゴーにとって、哲学的考察から生まれた「経済学」——グルネー流に「商業学 (science du commerce)」といい換えてもよい——という新しい学問は、ただ単に富の研究のための学問にとどまることなく、人間社会の改革を志向するものでもあった。そしてそのような改革の基礎には、人間の人間に対する諸権利の注意ぶかい研究の成果があったことを忘れてはならない。

事実、テュルゴーは財務総監に就任した翌年、国家組織改革私案を発表しているが、その要諦は、国家組織の大本をなす身分制議会の全国三部会 (États généraux) を地方住民の代表権を保証した地方自治制度 (municipalités) を基礎に再構築するということにあった。ことほどさように、テュルゴーは国王ルイ 16 世に自らの改革案とその正当性をつぎのように上奏していた。曰く、

人間の諸権利は、人間社会がこれまでに経験してきた種々さまざまの変遷や発展の経緯 (histoire des homme) にではなく、人間の本性 (leur nature) にもとづくものであります。[正当な] 理由もなしにつくられた制度を未来永劫不変にして不朽のものとするいわれはひとつとしてないのであります¹¹⁾。

はたしてそうであるとすれば、フランス経済学のオリジンと発展は、哲学の政治や社会問題の考究と密接な連携を抜きに語ることはできず、かれの代表作である『諸省察』はその到達点といわなくてはならない。

この点、いわゆる「アダム・スミス問題 (Adam Smith Problem)」の名で知られる、われらがスコットランド出身の思想家の手になる『道徳感情論 (Theory

11) Turgot [1775], p. 575. ちなみに、筆者がここで引用したテュルゴーのパラグラフにつき、社会思想史家の出口勇藏は 1942 年に発表した論文「テュルゴの歴史観」のなかで、「人間の諸権利は、人間の歴史に基づくものではなくして、人間の自然に基づくものである」(出口 [1942], 94 ページ) との訳をつけ、テュルゴーの「自然的秩序」を基準とした「歴史観」を批判している。しかしこれは誤った訳にもとづく誤った解釈であり、ありていにいえば出口の自作自演、独り相撲でしかない。そもそも、テュルゴーはケネーやスミスなども評価した「自然的秩序」には賛同していなかった。テュルゴーもまたモンテスキューの男爵どのの名著『法的精神 (De l'esprit des lois)』第 1 編第 1 章の冒頭のパラグラフの謂に同意するであろう。すなわち、「もっとも広い意味において、法とは事物の本性に由来する必然の関係の基礎である。この意味では、あらゆる存在が法をもつ——神は神の法をもち、物質界は物質界の法をもち、[中略]そして人間は人間の法をもつ」(Montesquieu [1748], p. 232. 訳 369 ページ)。それにもかかわらず、出口をしてかくい言わしめたのは、テュルゴーを「ヴォルテールの同時代者であり重農學説の完成者であるとともにアンシャン・レザームの最後の思想家」(出口 [1942], 81 ページ) に是が非でも仕立て上げなければならなかったからにほかならない。曲学阿世の徒の謂である。ついでながら、テュルゴーは「重農學説の完成者」ではなかったし、ヴォルテールはヴォルテールで、ルイ 15 世の寵姫ボンパドゥール夫人の侍医であったケネーとかれの入門を蛇蝎の如く忌み嫌ったことは、つとに知られるところである。なお、テュルゴーと「重農學説」との関連については、後出脚注 18) も参照されたい。

of Moral Sentiment)』と『国富論 (An Inquiry into the Nature and Causes of Wealth of Nations)』との間の思想的・学問的連絡、すなわち倫理学と経済学との関連を説くイギリスのありようとは明確に異なる道筋を歩んできたように見えなくもない¹²⁾。すくなくとも「スミス後」のブリテン島の経済学徒たちは、そのような観点から、かれらのいわゆる「経済学の父」の学説を解釈しようとしてきたことだけはまず間違いのないところである。

オーギュスト・ブショーは、テュルゴーが生きた時代のフランスとイギリスの間のエピステーメの相違に明示的に言及しているわけではないけれども、経済学という、すぐれて近代的な学問の生成と発展におけるテュルゴーの貢献を、ブリテン島の研究者が「経済学の父」と呼んで神棚に祭り上げたアダム・スミスの「先駆者 (précurseur)」とって高く評価していることから、ドーバー海峡兩岸のふたつの国の学問状況の相違に無関心であったとはいえない。この点は、アンリ・ボードリヤールも基本的に同じ見解であるといってよいと思われる。

その最大のポイントは、ブショーもボードリヤールもともに正しく伝えているように、「資本理論」をはじめとするグルネーの「商業社会」論の継承という

12) テュルゴーのいようを借りれば、イギリスの研究者たちのいわゆる「アダム・スミス問題」とは、倫理学や道德哲学の教員であったスミスの『道德感情論』と『国富論』との間の「言語」と「文法 (またはスタイル)」とが現実に没交渉であるかどうかを究明するものである。結論を先取りすれば、前者は倫理学・道德哲学の言語と文法を扱い、後者にあつては、それとはまるで異なる「市場経済」——あるいは「資本主義」といい換えてもよい——の言語と文法を論じることになるが、ありていにいえば、スミスにはそうした発想自体がなかった (スミスはサー・ウィリアム・ペティやサー・ジョサイア・チャイルドやサー・ジェイムズ・ステュアートの著書のページを操く程度程度の素養を身に付けていたのであるが、かれらについては口を閉ざしている)。スミスは市場経済の言語と文法を、1766年にパリを訪れテュルゴーをはじめとする当時の知識人や行政官などと会って議論したさいに仕入れ、『国富論』第2篇以降を書き記すことができたのである。スミスが「資本」相当の意味として“capital”という舶来のタームを、それまでの土着の“stock”と並行して用いているのは、その際立った事例であり、アンヌ＝クレール・ホイングのいわゆる『国富論』における「ふたつの言語」、「ふたつのスタイル」のゆえんである (Hoyng [2015], p. 25-6)。先に紹介したスミスのいわゆる「見えざる手によって、みずからは意図してもしなかった一目的 [社会一般の利益の増進] を促進することになった」の謂は、玉野井芳郎が的確に伝えるように、スミス流の「資本主義賛歌にほかならない」 (玉野井 [1956], 231 ページ)。

ところにある。かれらは、ピエール＝サミュエル・デュポンとかれの衣鉢を継ぐユージェヌ・デールやイポリート・デュサルらによるフランソワ・ケネーの「農業王国」論の後継者としてのテュルゴー解釈とは一線を劃していたといつてよい。この点は重要である。なんとなれば、テュルゴーがケネーの後継者で、フィジオクラート派の論客とする評価が、後世広く受け容れられてきたからである。とくにわが国ではそうである。

すなわち、新古典派経済思想史家、マルクス主義経済学史家を問わず、テュルゴーは重商主義からアダム・スミス学説の移行を橋渡しするフィジオクラート派のひとりであり、したがってまたテュルゴー学説になにがしかの“オリジナリティ”を認めるにやぶさかでないにしても、フィジオクラシーはスミス学説を支える先駆的な思想のひとつであつて、テュルゴー学説なるものはケネーの思想のある部分を発展させたにすぎず、やがてはスミスの手で完成される過渡的なものでしかないという料簡である¹³⁾。

ブショーのテュルゴー論を顧みるに、かれはボードリヤール、さらにはレオン・セーやオイゲン・フォン・ベーム＝バーベルクたちと同じように、テュルゴーをケネーやフィジオクラート派とは異なる経済理論の持ち主として評価していた。ありていにいえば、テュルゴーにはふたつの、たがいに相異なる解釈が19世紀このかた併存していたのであるが、わが国ではそのような認識は、旧制小樽高等商業学校の手塚寿郎をのぞけば、およそ皆無であつた。しかるに、わが国がテュルゴー＝フィジオクラート派のバイアスを色濃く映したことの理由を究明することは興味あるテーマであるが、ここではこれ以上立ち入ら

13) テュルゴーはケネーとグルネーの「弟子であつたことを生涯の誉れ」とするといつているが、ブショーはこのほか、モンテスキュー、ライプニッツ、ヴォルテール、かれとも交流のあつた博物学者・数学者のジョルジュ＝ルイ・ルクレール・ド・ビュフォンやジョージ・パークレー、アイルランド出身の宗教家・哲学者ジョージ・パークリーなどの影響を指摘している(Bouchot [1846], p. 14)。また、アンリ・ボードリヤールはこれに加えて、イタリアの哲学者ジャンバッティスタ・ヴィコの名を挙げている(Baudrillart [1846], pp. 20-1)。ブショーがテュルゴーを「孤高の思想家」と命名する理由は、かれに強い影響を及ぼした思想家であっても、これを絶対化しなかつた——いうなれば「セクト嫌い」と無縁ではなかつた。グルネーやケネーといえどもその例外ではなかつたというべきであらう。

ない。以下、ブショーのいうところのテュルゴー学説のオリジナリティ——とりわけ経済学の領域における貢献を中心に紹介していきたい。

4.

先に示唆するように、オーギュスト・ブショーはテュルゴーの『諸省察』における経済理論のトピックを列挙しているが、それは、大略、以下のとおりであった。すなわち、①商業の起源、②自由の原則（所有、職業選択、国際貿易など）、③農村経済、大規模耕作と小規模耕作との比較、両者の耕作条件の相違、④資本理論（資本の定義、貯蓄と投資など）、資本の異なる使途の生産と分配に及ぼす影響、⑤貨幣と価格、貨幣としての金・銀、⑥付利の合法化、利子率を決定する経済法則（利子率と貨幣数量）、利子率の人為的固定化の困難性、金融機関などである。

これらは、『諸省察』の「資本一般ないし貨幣収入」からのちの諸節のテーマであって、ブショーの時代には、ピエール＝サミュエル・デュボンの編集した『テュルゴー氏全集』収録テキストの第31節（デール＝デュサール版『テュルゴー全集』も同様）と推測されるが、のちに紹介するように、デュボンが著者に無断で原稿を改竄して『市民日誌』に掲載したものである。それゆえ、デュボン版『諸省察』は、20世紀になってギュスターヴ・シュルの編集した全集収録テキスト異なっており、テュルゴーのアイデアを忠実に映したものとはいえない（なお、シュル版『諸省察』では「資本一般ないし貨幣収入」は第29節）。

はたしてそうであったとしても、ブショーは『諸省察』を注意ぶかくかつぶさに読んでおり、しかも読み方はまったく正しい。何よりもまず、前半の30あまりの節は、資本理論を導出する前提として商業社会に先行する、テュルゴーのいわゆる「貨幣を知らない」社会——ラ・ブレード＝モンテスキューの男爵どの『法の精神』の「狩猟」、「牧畜」、「農業」に着想を得た諸社会——のありようを概説したものである。卒然として読めば、テュルゴーをフィジオクラート派の人間たちと同一視できるかのようであるが、テキストの主題が、商業社会すなわち資本と資本家を基軸とする人間社会の経済関係の解明であることに

思いを致せば、誤った解釈といわざるを得ない。

それにまた、資本概念を導出したのちのテーマが、資本の使途の生産や分配に及ぼす影響、貨幣の使用、利子率を決定する経済法則、利子率の人為的固定化の困難、金融機関（割引金庫（Caisse d'Éscompte）と称する公的金融機関の設立、のちの中央銀行であるフランス銀行（Banque de France）の前身）など、いずれも商業社会あるいは近代資本主義（Der moderne Kapitalismus）のエッセンスともいうべき諸問題を扱っているが、これらはなべてデュポンらフィジオクラート派の忌み嫌うテーマであった。

ブショーが、このむとこのまざるとにかかわらず、フィジオクラート派の手で潤色された『諸省察』のページを繰らざるを得なかったとしても、かれのテュルゴーの経済理論への理解にまったく問題はない。それどころか、これらのテーマは、経済学の古典形成にとって欠くことのできない重要性を有しており、多くの研究者によってテュルゴーの経済理論が継承されたことを雄弁に物語っているとさえいえる。そのなかにあつて、アダム・スミスは筆頭であり、マーク・ブラウグは「スミス『国富論』の最初の2篇のスケルトンは『諸省察』のなかにある」とまで言い切った。

ブラウグのいったことをより正確に理解する材料として、オランダの経済学史家アンヌ＝クレール・ホイングが自著『テュルゴーとアダム・スミス（*Turgot and Adam Smith*）』において提起したテュルゴーとスミス、したがってまた『諸省察』と『国富論』との間に16の「符合」をまとめた表を紹介したい（付表参照）。

ここで特記すべきポイントは、第1にホイングの列挙したテュルゴーとスミスとの間の16に及ぶ「符合」の半数以上が、ブショーが「テュルゴー追悼演説」のなかで指摘したテーマと重なっている点である。テュルゴーを「アダム・スミスの先駆者」と呼ばわったブショーこそは、テュルゴー研究の「先駆者」といってよいであろう。

その第2は、より大切なことであるが、テュルゴーの資本理論に関する理解である。ブショーは、テュルゴーが『諸省察』第29節において「資本一般」し

付表 『諸省察』および『国富論』の語句(用語)の相似性

テーマ	『諸省察』	『国富論』
私的所有の重要性	第 9 節	第 1 篇第 11 章
富の分配の不平等性	第 12 節	同 上
分業の重要性	第 3 節	第 1 篇第 1 章
5つの土地耕作方法	第 25, 28 節	第 2 篇第 5 章
労働報酬	第 6 節	第 1 篇第 8 章
所得再分配	第 5, 9, 13, 14 節	同 上
富の生産と分配に必要な投資の重要性(紡績業を例に)	第 50, 52, 60 節	第 2 篇序論
貯蓄と投資の関連 貯蓄性向と資本形成(または資本蓄積)	第 100 節 第 59 節	第 2 篇第 3 章 第 2 篇第 4 章
資本の異なる使途, 資本流通のあり方	第 82, 84 節	第 2 篇第 5 章
貨幣数量と利子率	第 74 節	第 2 篇第 4 章
貨幣としての金と銀	第 46 節	第 1 篇第 11 章
金と銀の価格	第 42 節	第 1 篇第 4 章
奢侈と浪費	第 80 節	第 2 篇第 3 章

[出所] Hoyng [2015], p. 65 より引用。ただし一部修正・加筆。

たがってまた資本の一般定式を貨幣タームで定義していることを強調し、資本を物量タームで定義するケネーとその一門の「前貸し (avance)」つまり資本ストックと峻別してる。

さらに第 3 に、テュルゴー利子論への高い評価を挙げなくてはならない。ブショーはここでテュルゴーがいにしえの聖人たちの^{ひそみ}壟に倣って金銭消費貸借を禁止する教義と、近代的商業社会における工業、農業、商業への投融資の理論とを混同して付利の「非合法」化を譲らないキリスト教神学の教条主義者たちに痛烈な批判を浴びせ、近代商業社会における付子の正当性を展開したことを正しく指摘した。それだけでなく、いわゆる「高利詐欺事件」(1769 年)にも言及していると思われる記述を読み取ることができることからみて、『諸省察』の「教条主義神学者批判」は言うに及ばず、テュルゴーの任地リモージュに隣接す

るアングモア地方のアングレームで起きた「事件」の公的報告書である「貨幣貸付に関する覚書 (Mémoire sur les prêts d'argent)」に目を通していたか、すくなくともこの報告書の内容をある程度まで知っていたと推察される¹⁴⁾。

この点は重要である。テュルゴーは幼少のおり神学校で教育を受け、長じて行政官の道を進むようになったのちも、つねに敬虔なカトリック教徒であったが、かれの真骨頂は学問と信仰とを明確に区別し、学問の世界にキリスト教神学を持ち込まず、徹底した世俗主義を学問の世界において貫いたことである。

ただ残念このうえないことであるが、ブショールは利子論をはじめ経済的テーマについて立ち入った紹介や分析を行っていない。しかしそうであるとしても、かれの議論が、ホイングや彼女の高く評価する先学のジャンニース・ギャレ＝アモノヤイー・セー・ルンドベリたちのテュルゴー理論の理解と評価とほとんど変わらないことは特記すべきであろう。うえて紹介したブショールのいわゆる「テュルゴーこそはアダム・スミスの先駆者」のゆえんである。すなわち、テュルゴーは新しい学問である「経済学」の言語と文法を作り出したが、テュルゴーこそはスミスに先んじて経済理論の数々を解き明かした歴史上最初の人物であったことを意味する¹⁵⁾。

なかでも、資本概念をふくむ資本論、貨幣論や利子論の評価がそうであり、

14) Bouchot [1846], p. 34. テュルゴーの「覚書」は、中央政府に提出する公式文書であるから、執筆直後これを読むことができる人間は限られていた。一般公衆が目に見えるようになったのは、デュボンが編集した『テュルゴー氏全集』に収録されて以降のことであった。そのデュボンにテュルゴーは1770年1月末に手紙で「覚書」にふれている。曰く、「わたしは貴君が『富〔の形成と分配に関する諸省察〕』の原稿のごく一部しか受け取ったすぎないということを知っているかどうかわかりません。わたしは〔1770年の年初に〕貸金業〔または利子〕に関する論稿を仕上げました。これは有益な論文です。貴君にこれをお送りしようにもお送りすることはできません。この論稿のなかで〔デュボンがテュルゴーに断りなく削除した『諸省察』のオリジナルコピー第75節のテーマである〕“mutuum date”に関する議論を取り入れました。わたしは大法官〔モーブラ侯爵ルネ・ニコラ〕と財務総監〔テレー師〕に、アングレームのすべての商取引を根底から覆すことを試みた巧妙な盗人どもの詐欺事件〔発覚〕のおりに作成したこの論稿をこれから送るところです」(Turgot [1770c], p. 372)。なお、テュルゴーは1771年にデュボンに送った書簡(Turgot [1771])のなかでもこの「覚書」に言及している。

15) さしあたり、Lundberg [1964]を参照されたい。また、中川 [2019b] もあわせて参照されたい。

ブショアの「追悼演説」から約40年後の1889年にオイゲン・フォン・バーム＝バーベルクが上梓した『資本積極理論 (*Kapital und Kapitalzins, Zweite Abteilung: Positive Theorie des Kapital*)』のなかで、かれはテュルゴーが「もともと簿記・会計の世界で生まれ落ちてさまざまな意味をもつに至った“capital”いう用語」を「資本」相当の意味で用いたことによって、「このタームの概念を最終的に書き換えた」¹⁶⁾ というのであるが、まったく正しい評価といってよいであろう。別言すれば、テュルゴーこそは“capital”という術語を資本相当の意味で用いた歴史上最初の人物であるということである。イギリスの経済学者アントニー・ブリュワーをして、テュルゴーを「古典経済学の創始者 (founder of Classical Economics)」¹⁷⁾ といわしめてたことの意味も、そのように理解しなければならない。

そうであったとしても、この分野における「歴史上最初の人物」という榮譽をひとりテュルゴーにのみ帰すことができないこともまたたしかである。ことほどさように、テュルゴーの資本理論はかれが終生“メントール”と慕ったヴァンサン・ド・グルネーに多くを負い、そしてそのグルネーはといえば、イギリス東インド貿易会社の総裁を務めたサー・ジョサイア・チャイルドの名著『新商業講話 (*A New Discourse of Trade*)』に示唆を得て「新しい富」の概念としての資本の原型にたどり着いた。

この過程は、グルネーがかれの協力者の与力を得て作成したフランス語版『新商業講話』とその「注解」(Remarques)の草稿に目を通せば容易に理解できる。ただし、当時出版されたのは翻訳だけで、「注解」は時の財務総監(現代の総理大臣に相当する行政の最高責任者)ジャン＝バティスト・ド・マシヨール・ダルヌーヴィルによる「出版差止」要求の結果日の目を見なかった。爾来、フランスの経済思想家シモーヌ・メイソニエがフランス国民議会(下院)図書館(Bibliothèque de l'Assemblée Nationale)で発掘した誤字脱字のまったくない最終

16) Böhm-Bwerk [1891], p. 25.

17) Brewer [2010], pp. 80ff. ちなみに、カナダ・ケベック州の大学でひさしく教鞭を執ったジル・ドスレールは、テュルゴーを「資本主義の理論家、自由主義の擁護者」(Dostaler [2010a], p. 74)と形容している。

稿かそれに近いグルネーらの原稿を校訂し2008年に出版するまで、ブショーはもとより、ベーム＝バーベルク、ルンドベリなどの研究者の活躍した19,20世紀だけでなく、21世紀に至るまで、グルネーの経済思想の全容を理解することは叶わなかった。

しかしながら、ブショーが1846年にアカデミー・フランセーズで行った「追悼演説」のなかでテュルゴーの経済理論のオリジナリティと革新性の評価を、ケネーやフィジオクラート派との関連ではなく、グルネー理論を継承するものと理解していることは特記すべきであるし、ここにブショーのテュルゴー論の現代性を見て取ることができる。そしてそれは同時に、テュルゴーの研究史——『諸省察』をはじめとする経済学の領域に限らず政治学、哲学、社会思想をふくむ——をふり返ったとき、つぎのような問題を提起することになるが、その最大のポイントはテュルゴーおよびフランソワ・ケネーとその門弟たちとの関係である。

摘要すればこうである。すなわち、テュルゴーはフィジオクラート派の有力メンバーであるとか、あるいはヨーゼフ・A. シュンペーターのように「テュルゴーはフィジオクラート派のメンバーではなかったが、これにシンパシーを抱いていた」¹⁸⁾ との解釈されてきたことである。そしてそのような解釈がある程

18) Schumpeter [1954], p. 244. ちなみに、カール・マルクスは、有名な『反デューリング論 (Anti-Düring)』の欄外注 (Randnoten) の草稿のなかで、オイゲン・デューリングの一節を引用している。すなわち、「テュルゴーとともに、フィジオクラシーは実践的にも理論的にも終焉していた」(Marx [1877], p. 1525)。マルクスがこのパラグラフを肯定的な意味で引用したのかどうかははっきりしない恨みが残るものの、仮に肯定的な意味合いであるとすれば、マルクスはテュルゴーを「最後のフィジオクラート派」と見做していたと考えられないでもない。だが、そうだとすると、「最後の」とはどのような意味で解すればいいか疑問なしとしない。結論だけを指摘すれば、マルクス主義経済学者たちは、マルクスがテュルゴーを「フィジオクラート派」と見做した証と解釈しているようである。ことほどさように、マルクスはテュルゴーをフィジオクラート派の理論の後継者であると考えているようにみえる。例えば、マルクスは『資本論』第2部第2編第10章「固定資本と流動資本に関する諸学説。フィジオクラート派とアダム・スミス」において、テュルゴー流に“Kapital”というタームを使いながらも、それがあたかもケネーの“avances”と同じものと捉えているかのようであり、その意味からすれば、馬場宏二が「資本—資本金—資本主義」と題する論稿のなかで、テュルゴーの資本理論のスミスに対する「先駆性」を認めつつも、ケネーの“avances”を直接 capital に言い換えて多用した(馬場 [2008], 335 ページ)

度まで受け容れられてきたのであるが、ことわが国のようなテュルゴー研究の蓄積のない、主として英語圏の研究に依拠する国の研究者の間ではなかば当然視されてきたといって決して誇張でない。

なるほど、テュルゴーの友人であったピエール＝サミュエル・デュボンやかれの衣鉢を継ぐユージェヌ・デールやイポリート・デュサルらの編集したテュルゴーの全集の、すくなくとも19世紀にあつてテュルゴー研究を進展せしめるうえでの貢献を評価するにやぶさかではない。何にもまして、デュボンがテュルゴーの『諸省察』のテキストを世に送り出すべく著者を説得したことは高く評価する必要がある。ただそのさい、デュボンがテュルゴーに無断で原稿の中身を改竄し、テュルゴーの激しい怒りを買い、オリジナルテキストどおりの抜刷を別途刊行することを要求したことはつとに知られるところである¹⁹⁾。

デュボンがテュルゴーのオリジナルテキストを改竄したのは、ありていにいえば、テュルゴー自らケネー理論の信奉者ではないと公言しているように、フィジオクラート派と異なる主張をしていることが業腹で我慢ならなかったからであった。デュボンには不本意このうえなかったであろうが、テュルゴーの要求

と解釈したものゆえなしとしない。テュルゴーおよびケネーとその一門との決定的相違は、テュルゴーの資本論が『諸省察』第29節で資本を貨幣タームで定義する「貨幣的資本」であるのに対して、後者はなべて物量タームの「資財」ないし「資本ストック」だという点にある。この点は、資本の用途をめぐるテュルゴーとスミスの相違に連なる重要な視点である。詳細はさて置き、ルンドベリは、ケネーの前貸し理論の意義を認めるマルクスであるが、テュルゴーが“Kapital”すなわち“capital”というタームを用いたこと自体が、テュルゴーおよびケネーとその一門の理論とを区別していたと解釈している (Lundberg [1967], pp. 57-9, 114)。なお、この点については、Cannan [1927]; Brewer [2011]; 藤塚 [1990]; 中川 [2013, 2019] などともあわせて参照されたい。

- 19) テュルゴーは1770年3月にデュボンに送った書簡で、著者に無断で原稿に手を入れたこと(改竄)に対していつになく厳しい口調で怒りをあらわにしている。すなわち、「貴君は〔『諸省察』の原稿を〕著者の断りもなく改竄したのです。資本の用途と資本の形成とを混同しています。支出を収入と呼び、節約と貨幣の蓄積が異なるものと思ひ込んでいるようですが、これら二組の言葉はそれぞれ同義語です。思想の曲解、むしろ誤った用語法というべきでしょう。それも、わが親愛なるドクトゥル〔・ケネー〕が初期の著作のなかで気づかなかった誤った表現のいくつかを故意に隠すために歪められた用語法にほかなりません。まさにセクト主義のなせる業です」(Turgot [1770d], p. 383)。

に従って、くだんの抜刷を 150 部作成してテュルゴーに提供している。だが、ケネー学説を金科玉条とするデュボン¹は、テュルゴー亡き後「テュルゴー伝」を上梓し、やがてテュルゴー全集としては初の『テュルゴー氏全集』を刊行するも、その中身はフィジオクラート派風に味付け処理されたものであり、しかもデュボンの意思はデール＝デュサルらによって受け継がれた。このような経緯に思いを致せば、後世テュルゴー研究を志す人間たちが、あたかもテュルゴーおよびケネーやフィジオクラート派とが一体であるかのように考えたとしても非難できないかもしれない。

しかるに、デール＝デュサル版全集刊行の 2 年後にアカデミー・フランセーズでオーギュスト・ブショーが行った「テュルゴー追悼演説」では、フィジオクラート派はもとより、一門の開祖フランソワ・ケネーの影響を認めることはできない。ブショーは、コンドルセ侯爵やアンドレ・モルレなどを例外とすれば、フィジオクラシーによって潤色されたテュルゴー論とは異なる、ほとんど初期の研究業績といってよい。そしてさらにいうなら、いわゆる“定説”をくつがえすが如きテュルゴー論がアカデミーで優等賞を受賞したことは特筆に値する。

このようにみていくと、テュルゴー論——すくなくとも研究の初期段階におけるテュルゴー論は、テュルゴーがケネーの後継者であり、フィジオクラート派の最高峰であるとするおなじみの解釈とは異なるテュルゴー像を差し示していたといわなくてはならない。しかも、そのように説く人間のなかにはブショーだけでなく、アンリ・ボードリヤール、ピエール＝ルイ・ローデレール、レオン・セーなどの同時人がおり、これらにイギリスのヘンリー・ヒッグズやオーストリアのオイゲン・フォン・バーム＝バーベルクなどを加えることも可能である。とくにブリテン島におけるケネー研究の碩学ヒッグズは、テュルゴーとヴァンサン・ド・グルネーとの師弟関係を、ケネーやフィジオクラート派との関係以上に重視する。こうした研究の蓄積に支えられて、ギュスターヴ・シエルは 20 世紀初頭の 1913 年から 10 年の歳月を費やして 5 巻からなる『テュルゴー全集』を世に送り出したのである。

5.

以上みてきたように、テュルゴーの研究初期史を顧みれば、テュルゴーおよびフランスワ・ケネーとその一門のフィジオクラート派との関係を重視するものと、テュルゴーが“メントール”と仰ぎ終生敬愛したヴァンサン・ド・グルネーとかれの協力者たち——いわゆるグルネー・サークルとの関係を重視するものとのふたつの系譜があった。しかもそれらは、テュルゴー研究の比較的初期の段階から認められ、本稿で紹介したオーギュスト・ブショールがアカデミー・フランセーズで行った「追悼演説」は、後者の系譜に属する際立った事例と見做すことができる。

もちろん、テュルゴー研究の本家をもって任じるピエール＝サミュエル・デュボンをはじめフィジオクラート派に属する人間たちの発掘したテュルゴーの手蹟と特定できる未発表の論稿や書簡をベースに編集・刊行された全集や著作集が、のちのテュルゴー研究にとって不可欠の資料のひとつを提供することになったことは認めなければならぬ。

しかし、それは見ようによっては、フィジオクラート派のバイアスを色濃く映したものとの非難をまぬかれなかったことも事実であり、それがために研究者の多くを誤った方向に導き、誤ったテュルゴー像を生み出すことにもなった。ブショール最大の功績は、フィジオクラート派のバイアスを色濃く映した資料が大半を占めるなかにあっても、これと距離を置いたテュルゴー像を一般に知らしめたところにある。ただし、ブショール、そしてかれに影響されたアンリ・ボードリヤールはその草分けと呼ぶことができる。しかもここで特記すべきは、ブショールやボードリヤールらの系譜に属する研究の成果がやがてフランス国内はもとよりイギリスやオーストリアさらにはアメリカでも認められるようになったことである。

テュルゴーを「アダム・スミスの先駆者」と見做す研究が数多く発表されてきたのはそのためである。その意味するところは、テュルゴー研究はこれをアダム・スミスのそれとあわせて行う必要があるということに尽きる。それは多分に「古典経済学の開祖」がテュルゴーという考え方に連なることにほかなら

ない。ことほどさように、近年の欧米諸国の研究をみるに、「古典経済学の先駆者テュルゴー、イギリス古典経済学の開祖アダム・スミス」といい得るような研究も決してすくなくない²⁰⁾。

そのなかでわが国は蚊帳の外といってよい。世界でもまれに見る“フランソワ・ケネー鼯鼠”，“アダム・スミス鼯鼠”の学風もさることながら，戦前・戦中・戦後を通じて，手塚寿郎を唯一の例外として，テュルゴー研究が皆無という学問状況に起因する。テュルゴーに先行する，ジョン・ロー，リシャル・カンティヨンやヴァンサン・ド・グルネーについても同じことで，ごくごく数えるほどの研究論文しか発表されていない。しかもその多くは，久保田明光や藤塚知義に象徴されるように，重商主義学説からアダム・スミス学説に至る間の，過渡的学説であるフィジオクラート派の有力メンバーの経済学者という位置づけである。なるほど藤塚はイー・セー・ルンドベリの影響も手伝って，テュルゴーの「資本」理論の，学説史上の「先行性」を一定程度認めるものの，それでもテュルゴー学説は究極的にはスミス学説に吸収される性格のものであり，スミス学説のように一家をなすものではないという料簡であった。

こうした解釈の問題点が，じつはわが国の研究者たち——もちろん，すべてではないが——におけるテュルゴー学説への無理解のなせる業であったことを，筆者は『テュルゴーとアダム・スミス』のなかで踏み込んで論じているので，ここでは詳論しないけれども，ひとつだけ断っておきたい。という意味はこうである。

すなわち，重商主義からアダム・スミスに至る過渡期の学説として，経済学の歴史のなかにフランソワ・ケネーとかれの一門の経済理論を位置づけることが可能であれば，テュルゴーがたとえフィジオクラート派の有力メンバーであろうと，フィジオクラシーが一家をなす経済ドクトリンでない以上，経済学の

20) 英経済紙『フィナンシャル・タイムズ (Financial Times)』の重鎮にして筋金入りの“ハイエキヤン”のサミュエル・ブリタンは同紙に寄稿したエッセーでつぎのようにいっている。すなわち，「スコットランド出身の思想家アダム・スミスは経済学の生みの親ではなかった。かれはこの分野におけるイギリス本流の慣わしをかたちづかった最初の人物である」(Brittan [2007])。

歴史のセンターステージで論じる必要性はないということになろう。せんじ詰めれば、テュルゴーは「その師」ケネーともども、スミス学説誕生のエピソードのひとつでしかないというのである。はたしてそれが歴史的眞実であれば、大学で学ぶ経済学の入門書の「経済思想史」や「経済学説史」のチャプターはまことにもって薄っぺらで単純至極——ありていにいえば標準的な中高の教科書や受験参考書の水準とさして変わらないであろう。

翻って、オーギュスト・ブショーの系譜に属するテュルゴー研究もまた「眞なり」とすれば、テュルゴーをふくむケネー周辺の人間たちを十把ひとからげに“フィジオクラート派”のレッテルを貼ることが間違いということになることは見やすい事実である。はたして事態がそのようであるとするならば、事はそれほど単純でも明快でもないことになる。けだし、マーク・ブラウグのいう「スミス『国富論』の最初の2篇のスケルトンは『諸省察』のなかにある」の意味をいま一度吟味検討しなければならないであろう。

筆者の調べた限りでは、間近くはアンヌ＝クレール・ホイングをはじめとする研究者たちが、18世紀のコンドルセ侯爵やデュポンを嚆矢とするテュルゴーの経済理論、テュルゴー理論のアダム・スミスへの影響——ブショーの謂に做えば「アダム・スミスの先駆者」テュルゴーの学説の意義と経済学の古典形成への貢献——に関する質の高い優れた業績を発表してきた。前掲拙著『テュルゴーとアダム・スミス』はそうした欧米諸国の研究者たちの優れた研究成果を踏まえてテュルゴー理論のスミスへの継承と発展の系譜の解明に挑んだものである。

なお蛇足ながら、ひとつ申し添えておけば、この国の研究者の度し難いまでのスミス鼯尾はさて措き、ブショーのテュルゴー研究の系譜に連なる欧米の研究者たちの研究業績がこの国で一顧だにされなかったのはなぜか、世界的に見て奇妙奇天烈なわが国の研究状況やその背景を究明する必要があると思われる。戦前のわが国において、手塚寿郎によるグルネーやテュルゴーの優れた研究成果が発表されていたから、これに一通り目を落とすだけでも違った状況が生まれたように考えられるが、戦後はほぼ完全に黙殺された。手塚の研究業績は、

テュルゴー経済理論の初期研究の成果をフォローし、吟味検討していたという点で高い質を備えているといわなくてはならない²¹⁾。

6.

もとより、現代のテュルゴー研究と比較して、オーギュスト・ブショーやアンリ・ボードリヤールらの初期研究がいかに優れているとしても、研究状況や資料の制約も手伝ってフォローできなかったテーマがあることも事実である。最後に以上のことを紹介して本稿のむすびとしたい。先廻りしていえば、いずれもテュルゴーの交友関係に付随するものであり、この問題を考えるさい、とくにふたりの“ジョック (Jock)” の名を逸することはできない。ひとりはいはデヴィッド・ヒューム、いまひとはアダム・スミスである。

諸賢ご高承のとおり、ヒュームは、1763年にコンウエイ男爵フランシス・シーモア＝コンウエイ（のちのハートフォード侯爵）の推薦によって駐仏英大使秘書官としてパリに赴任してダランベールらと交流するが、この啓蒙思想家のちにテュルゴーをヒュームに紹介したといわれる。ここでは詳述しないけれども、テュルゴーはヒュームと政治、経済、哲学などのさまざまな分野で意見交換し、やがて肝胆相照らす仲となった。ヒュームにとって、テュルゴーは大親友のダランベールにつぐフランスでの大切な友人となり、「誠実で思慮深い政治家」とまでいわしめた。この点、ヒュームのアダム・スミスに対する関係がどこまでも同郷の後進に対するものであったのと対照的であった。かたやテュ

21) 山川義雄が1948年に『早稲田大学政治経済雑誌』に発表した「十八世紀佛蘭西主観價值論の形成論」と題する論稿のなかで、主観價值説の主張に関してジャン＝ジョゼフ＝ルイ・グラスランがテュルゴーに先行することを詳細な考証によって明かした「わが手塚教授」の所説を高く評価すると書き記したのは、手塚を評価した唯一の例外として特記する必要がある。だが、われらが山川教授も、1968年に上梓した『近世フランス経済学の形成』（世界書院刊）——山川の学位請求論文——にこの論稿を再録するにあたり、「わが手塚教授」の名を取り下げるなどの改稿をほどこしている。詳細はさて置き、山川のテュルゴー評価がこの20年の間に「わが手塚教授」の所説から距離を置き、常盤の森の重鎮・久保田明光のフィジオクラート派との関連を重視するものへと変質したことが、主因である。なお、以上くわしくは、中川 [2016], 201-2 ページを参照されたい。

ルゴーはテュルゴーで、ヒュームという人物への敬意はもとより、かれの思想にも共感するところが大きであった。しかし、ふたりの交流で特記すべきは、ヒュームが気の置けない仲のアンドレ・モルレ神父らと協力してアダム・スミスをテュルゴーに引き合わせた中心人物であったということである。

ブショーはテュルゴーとヒュームとの交友関係については言及していないが、かれの時代には、テュルゴーとヒュームの交流の詳細を明かす研究はおろか、書簡や文書などの歴史的資料も目にすることはできなかった。実際、バートンの手になる『デイヴィッド・ヒューム伝』が刊行されたのは、奇しくもブショーがアカデミー・フランセーズで「テュルゴー追悼演説」を行ったのと同じ年（1846年）であった。しかも、ヒューム伝の補巻『著名人諸氏のデイヴィッド・ヒューム宛て書簡集』を世に問うにはさらに3年の月日を要した。このなかには、テュルゴーがアダム・スミスと出会って語らった旨の報告をはじめ興味深い書簡7通が収録されている。

そのアダム・スミスとテュルゴーとの出会いは、今日では周知の範疇に属するが、それは、スミスのいわゆる「友情と尊敬の念」をもって接したテュルゴーとの人的交流をいうだけではない。経済学黎明期のふたりの偉人の交流は、テュルゴー理論の継承と『国富論』完成への道でもあった。ここに、テュルゴーとスミスとの邂逅、交友関係を論じる重要性がある。いい換えるならば、テュルゴーとスミスとの交流の重要性は、とりも直さず、テュルゴーの『諸省察』とスミスの『国富論』との関係を論ずることに連なるところにある。

不幸にして、ブショーやボードリヤールはこれらの題材を論じる材料に恵まれなかった。ふたりの偉人の交流、友人関係の謎を解き明かす研究は20世紀にゆだねられることになるのであるが、そのさいオイゲン・フォン・バーム＝バーベルクをはじめとする19世紀の研究者の貢献を忘れてはならない。詳細は他の機会に論じたので割愛するが、一例——それも最重要事例——を示せば、資本概念の生成と発展に関して、先に紹介したように、バーム＝バーベルクが、もともと簿記・会計の世界で生まれ落ちてさまざまな意味をもつに至った“capital”いう用語の「概念を最終的に書き換え」、「資本」相当の意味で用いた

歴史上最初の人物がテュルゴーであると特定したことであり、かれの所説が、スミスによるテュルゴー理論の継承を裏付ける決定的なエビデンスとなった²²⁾。

すなわち、「資本」といえばブリテン島土着の“stock”を用いていたスミスが、“capital”と並行して使うようになったのは、1766年にパリでテュルゴーと出会ったのちに執筆したといわれる『国富論』第2篇以降であることに思いを致せば、テュルゴー理論の継承は否定できない。それどころか、のちのプロセスに思いを致せば、テュルゴーの「資本理論」のブリテン島における普及の功の大なる人物は、スミスをおいてほかにいない。その意味からすれば、テュルゴーを「アダム・スミスの先駆者」と呼ばわったブショーの面目躍如といわなくてはなるまい。

みられるように、ブショーらによるテュルゴー経済理論の初期研究は、時代や資料の制約があるとはいえ、その中身は今日の研究と比較してもすこしも遜色がない。むしろ、テュルゴーへの影響という点では、ケネーやその一門よりもむしろグルネーを多とし、前者とは一線を劃するテュルゴー理論の研究を他に先駆けて発表したことは、ブショーらの初期研究の最大の功績であった。

しかるに、ブショーらの研究成果を一顧だにしなかった、そしていまも顧みる気配のないわが国の経済学の古典形成の研究の、欧米諸国の研究と比較するさいの致命的な弱点をなしているといっても過言ではない。けだし、世は国際化、グローバルゼーションを重んじるといいつつも、どういいうしだい英語文献を重宝しこれを金科玉条とする風潮を思えばなるべくしてなったというべき

22) ベーム＝バーベルクの所説をいち早く評価したのは、イー・セュー・ルンドベリであった。自身の学位請求論文の付論として1967年に上梓した『テュルゴーの匿名の翻訳者——『諸省察』とアダム・スミス』のなかで、スミスによるテュルゴーの資本理論の継承、なかでも資本の形成、資本の蓄積、貯蓄と投資の相互関係といった言語と文法を用いてフランス流の経済学の習得に余念がなかったことを解き明かしている。その後、フランスの言語学者ジャンヌ・ギャレ＝アモノはルンドベリの研究をシタックス（構文論）という言語学的手法を用いて深化した。アンヌ＝クレール・ホイングは自著『テュルゴーとアダム・スミス』において、ふたりの碩学の研究業績を発展させるかたちで、テュルゴーの『諸省察』と『国富論』との「符合」——最低16箇所あるという——を体系的に考察している。以上、Lundberg [1967]; Gallais-Hammon [1982]; Hoyng [2015] を参照されたい。なお、中川 [2019] で紹介しているので参照されたい。

かもしれない。そしてそれはそれとして興味をそそられるテーマであるとはいえ、ここでこの問題を論じることは本稿のテーマをはるかに超える。後日改めて論じることを約して、ひとまずペンを擱くことにしたい。

(2019年7月24日脱稿)

参考文献

- Baudrillard, Henri [1846], “Turgot”, *Revue des Deux Mondes*, Période initiale, tome 14: réimpression FB Editions, printed in Great Britain by Amazon.
- Béry, Lucien [2009], *La France moderne 1498–1789*, Paris, PUF (Presses Universitaires de France); Quadrige Manuels.
- Bouchot, Auguste [1846], “Éloge de Turgot, discours qui a obtenu la première mention dans la séance du 10 septembre 1846”, Paris, Académie française”, date la première édition 1846: Source gallica.bfn.fr/Bibliothèque nationale de France.
- Bouchot, Auguste [1854], *Histoire du Portugal et de ses colonies*, Paris, L’Hachette: Classic Reprint, Forgotten Books, 28 juillet 2018
- Böhm-Bawerk, Eugen von [1891], *The Positive Theory of Capital*, translated with a preface and analysis by William Smart: originally published in German as *Kapital und Kapitalzins, Zweite Abteilung: Positive Theorie des Kapitals*, 1889, Gedruckt in Österreich: reprint 1923, G. E. Stechert & Co, New York.
- Brewer, Anthony [2010], *The Making of the Classical Theory of Economic Growth*, London/New York, Routledge.
- Brittan, Samuel [2007], “The mediocrity of circumstances”, *Financial Times*, February 22.
- Burton, John Hill [1846], *Life and Correspondance of David Hume: From the Pappers Bequeathed by His Nephew to the Royal Society of Edinburgh, and Other Original Sources*, Vol. I and II, Edinburgh; Classic Reprint, Forgotten Books, 2012.
- Burton, John Hill [1849], *Letters of Eminent Persons Adressed to David Hume: From the Pappers Bequeathed by His Nephew to the Royal Society of Edinburgh*, Edinburgh and London, William Blackwood and Son, MDCCCXLIX (1849); Kessinger Legacy Reprints Publishing, 10 September 2010.
- Burton, John Hill Burton [1860], *The Book-Hunter*, Edinburgh, George Routledge and Son, February: A New Edition with a Memoir of the Author; Fili-Quarian Classics, 12 May 2010.
- 村上清訳『書物の狩人』図書出版社, 1993年。
- Cannan, Edwin [1921], “Early history of the term capital”, *Quarterly Journal of Economics*, Vol. 35, Issue 3, 1 May.
- Charles, Loïc [2009], “Le moment de ‘Vincent de Gournay: Réflexions à props des *Remarques sur le commerce* de Josiah Child, éditées et préfacées par Simone Meyssonnier (2008)”, *Cahier d’économie politique: Histoire de la pensée et théorie*, 56, Publié avec le soutien du CNRS, de l’Université Paris X-Nanterre et de Science-Po Lille, Editions L’Harmattan.
- Daire, Eugène et Hipolyte Dussard [1844], “Notice historique sur la vie et le ouvrages de Turgot”, *Œuvres de M. Turgot*, tome I, Nouvelle édition, classée par ordre de matières avec les notes de Dupont de Nemours, augmentée de lettres inédites, des questions sur le commerce, et

- d'observations et notes nouvelles, par MM. Eugène Daire et Hipolyte Dussard, Paris, Réimpression de l'édition 1884, Osnabrück, Otto Zeller, 1966.
- Dostaler, Gilles [2010a], "Turgot, théoricien du capitalisme, avocat du libéralisme", *Alternatives Économiques-Mensuel*, n° 290, novembre.
- Dostaler, Gilles [2010b], "Vincent de Gournay, précurseur du libéralisme et protectionniste", *Alternatives Économiques-Mensuel*, n° 296, novembre.
- Gallais-Hammono, Janine [1982], "Le premier exemple d'un concept économique en extension et en compréhension: le concept de capital travaillé par Turgot", dans Bordes, Christian et Jean Morange (sous la dir. de), *Turgot, économiste et administrateur: Acte d'un séminaire organisé par la Faculté de droit et de sciences économiques de Limoges pour le bicentenaire de la mort de Turgot, 8, 9 et 10 octobre 1981*, Limoges, Presses Universitaires de France: Publications de la Faculté de droit et de sciences économiques de l'Université de Limoges.
- Gournay, Jacques Vincent de [2008 (1754)], *Remarques sur le commerce de Josiah Child; dans Traité sur le commerce de Josiah Child; suivi des Remarques de Jacques Vincent de Gournay: texte intégral d'après les manuscrits*, édition et préface de Simone Meyssonier, Paris, Éditions L'Harmattan.
- Hoyng, Anne-Claire [2015], *Turgot et Adam Smith: Une étrange proximité*, Paris, Honoré Champion : Champion Essais 44.
- Hutchison, Terence Wilmot [1982], "Turgot and Smith", dans: Bordes, Christian et Jean Morange (sous la dir. de), *Turgot, économiste et administrateur: Acte d'un séminaire organisé par la Faculté de droit et de sciences économiques de Limoges pour le bicentenaire de la mort de Turgot, 8, 9 et 10 octobre 1981*, Limoges, Presses Universitaires de France: Publication de la Faculté de droit et de sciences économiques de l'Université de Limoges.
- Hutchison, Terence Wilmot [1988], *Before Adam Smith: The Emergence of Political Economy 1662-1776*, London/New York, Basil Blackwell.
- Lundberg, I. C. [1964], *Turgot's Unknown Translator: The Réflexions and Adam Smith*, The Hague, Martinus Nijhoff.
- Marx, Karl [1867], *Le Capital : Livre premier*, Traduction par Joseph Roy, revue Maximilien Rubel; dans *Marx: Œuvres*, tome I — Économie, Édition établie et annotée par Maximilien Rubel, Bibliothèque de la Pléiade, Paris, Gallimard, 1968.
- Marx, Karl [1877], "En marge de l'histoire critique de l'économie politique d'Eugen Düring": traduction française par Rubel et Évrard: "Randnoten zu Dürings Kritische Geschichte der Nationalökonomie", dans *Karl Marx: Œuvres-Économie*, tome I, édition établie et annotée par Maximilien Rubel, Bibliothèque de la Pléiade, Paris, Gallimard, 1968.
- Meyssonier, Simone [2008], "Présentation", dans : *Traité sur le commerce de Josiah Child: suivi de Remarques de Vincent de Gournay*, édition et préface de Simone Meyssonier, Paris, Éditions L'Harmattan.
- Montesquieu, Charles-Louis Secondat, baron de La Brède et de [1748], *De l'esprit des lois*, Bordeaux, Publication de dialogue de Sylla et d'Eucrate; dans Montesquieu: *Œuvres complètes*, tome II, Edition établie et annotée par Roger Callois, Bibliothèque de la Pléiade, Paris, Gallimard, 1951. 井上幸治訳『法の精神』、『世界の名著』中公バックス (34), 中央公論社, 1980 年, 所収。
- Morellet, André (l'abbé) [1821], *Mémoires de l'abbé Morellet inédits sur le Dix-huitième siècle et sur la Révolution*, deuxième édition (1822), considérablement augmentée par Pierre Edouard

- Lémontey, Paris, Librairie française de Ladvocat (Slatkine reprint, 1967); *Mémoires de l'abbé Morellet*, Paris, Mercure de France, 2000: Collection (Le Temps Retrouvé). 鈴木峯子訳「十八世紀とフランス革命の回想」, 『自伝・回想録——十八世紀を生きて』(ただし抄訳), 中川久定・村上陽一郎責任編集「十八世紀叢書」I, 国書刊行会, 1997年, 所収。
- Murphy, Antoin E. [2009a], “Anne Robert Jacques Turgot: The Importance of Capital”, in Murphy, *The Genesis of Macroeconomics: New Ideas from Sir William Petty to Henry Thornton*, Oxford, Oxford University Press, 2009.
- Murphy, Antoin E. [2009b], “Adam Smith: Land, Labour, Capital, and Social Cement”, in Murphy, *The Genesis of Macroeconomics: New Ideas from Sir William Petty to Henry Thornton*, Oxford, Oxford University Press, 2009.
- Perrot, Jean-Claude [1992], *Une histoire intellectuelle de l'économie politique: XVII^e-XVIII^e siècle*, Paris, Édition de l'École des Hautes Études en Sciences Sociales: Civilisations et Sociétés 85.
- Rae, John [1895], *Life of Adam Smith*, London and New York, Macmillan Company; reprint, Cosimo Classics, New York, 2006. 大内兵衛・大内節子訳『アダム・スミス伝』岩波書店, 1972年。
- Smith, Adam [1776], *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, edited, with introduction, notes, marginal summary and an enlarged index by Edwin Cannan, M. A., New York, Random House, 1937; reprinted 1965. 大河内一男訳『国富論』, 『世界の名著』31, 中央公論社, 1968年。
- Turgot, Anne Robert Jacques [1749], “Lettre à l'abbé de Cicé du 7 avril, Paris”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome I, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1753–1754], “Plan d'ouvrage sur le commerce, la circulation et l'intérêt d'argent, la richesse d'états”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome I, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1755], “Questions importantes sur le commerce, à l'occasion des oppositions au dernier bill de naturalisation des protestants étrangers de Josiah Tacker”: ouvrage traduit de l'anglais de Josiah Tacker, paru en 1752 sous le titre de (Reflection on the Expediency of a Law), éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome I, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1766a], “Lettre à Pierre-Samuel Dupont du 23 mars, Limoges”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome II, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1766b], “Lettre à David Hume du 23 juillet, Limoges”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome II, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1766c], “Lettre de Turgot à David Hume du 27 juillet, à Paris, au soir”, in *Letters of Eminent Persons Addressed to David Hume*, from the Paper Requeathed by His Nephew to the Royal Society of Edinburgh edited by John Hill Burton, Edinburgh and London, William Blackwood and Son, MDCCCXLIX (1849); Kessinger Legacy Reprints, Kessinger Publishing, 10 September 2010.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1766d], *Réflexions sur la formation et la distribution des richesses*, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome II, Paris, Librairie

- Félix Alcan, 1913–1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1767a], “Lettre à Pierre-Samuel Dupont du 3 janvier, Limoges”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome II, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1767b], “Lettre à David Hume du 25 mars, Limoges”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome II, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1767c], “Observations sur le mémoire de M. Saint-Péravy”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome II, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1767d], “Observations sur un mémoire de M. Graslin”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome II, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1769], “Valeurs et monnaies (Projet d'article)”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome III, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1770a], “Mémoire sur les prêts d'argent (Limoges, janvier)”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome III, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1770b], “Lettre à Pierre-Samuel Dupont du 12 janvier, Limoges”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome III, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1770c], “Lettre à Pierre-Samuel Dupont du 30 janvier, Limoges”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome III, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1770d], “Lettre à Pierre-Samuel Dupont du 23 mars, Limoges”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome III, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1770e], “Lettre à Pierre-Samuel Dupont du 29 mars, Limoges”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome III, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1771], “Lettre à Pierre-Samuel Dupont du 15 février, Limoges”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome III, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1774], “Lettre à (Antoine-Bernard) Caillard du mai 5, Paris”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome IV, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1775], “Mémoire sur les municipalités”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome IV, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1778], “Lettre au Docteur Price du mars 22, Paris”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome V, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- Vissol, Thierry [1982], “La notion de 〈sur-le-champ〉 dans la théorie du capital de Turgot”, dans Bordes, Christian et Jean Morange (sous la dir. de), *Turgot, économiste et administrateur*:

Acte d'un séminaire organisé par la Faculté de droit et de sciences économiques de Limoges pour le bicentenaire de la mort de Turgot, 8, 9 et 10 octobre 1981, Limoges, Presses Universitaires de France; Publications de la Faculté de droit et de sciences économiques de l'Université de Limoges.

馬場宏二 [2008], 『経済学古典探索——批判と好奇心——』御茶の水書房。

藤塚知義 [1990], 『アダム・スミスの資本理論——古典経済学の成立と経済学クラブの展開』日本経済評論社。

出口勇藏 [1942], 「テュルゴの歴史観」, 京都帝國大學經濟學會『經濟論叢』第54巻第6號, 所収。

久保田明光 [1965 (1940)], 『重農学派経済学——フィジオクラシー (第5版)』前野書店 (同書の初版は1940年刊行の『新經濟學全集』 (日本評論社) に久保田寄稿の論文「フィジオクラシー」のちに同稿を加筆・補筆, 前野書店から1950年に『重農学派経済学』の論題で出版)。

中川辰洋 [2006/2007], 「リシャル・カンティヨンと価格メカニズム (I・II)」, 青山学院大学経済学会『青山経済論集』第58巻第3, 4号, 所収。

中川辰洋 [2011], 『ジョン・ローの虚像と実像——18世紀経済思想の再検討——』 (青山学院大学経済学研究所研究叢8) 日本経済評論社。

中川辰洋 [2013], 『テュルゴー資本理論研究』日本経済評論社 (平成25年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費事業 (科学研究費助成金) (研究成果公開助成金「学術図書」課題番号255151)。

中川辰洋 [2016], 『カンティヨン経済理論研究』日本経済評論社 (平成28年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費事業 (科学研究費助成金) (研究成果公開助成金「学術図書」課題番号16HP5144)。

中川辰洋 [2018], 「書評 Hoyng, Anne-Claire, *Turgot et Adam Smith: Une étrange proximité*. (Champion Essais 44) 216 p. 2015 (Champion, FR)」, 経済学史学会『経済学史研究』第59巻第2号, 1月, 所収。

中川辰洋 [2019a], 「書評 ジョン・ヒル・バートン著『書物の狩人』, 図書出版社 (村上清), 1993年」, 青山学院大学経済学会『青山経済論集』第70巻第4号, 3月, 所収。

中川辰洋 [2019b], 『テュルゴーとアダム・スミス』日本経済評論社 (9月20日刊行予定)。

小原敬士 [1948], 『近代資本主義の範疇——ゾンバルトの「資本主義理論」』青木書店。

手塚壽郎 [1927], 「グルネーの経済思想 (其一〜六)」神戸高等商業學校『國民經濟雜誌』第44巻第1, 2, 3, 4巻, 第45巻第1, 2號, 所収。

手塚壽郎 [1933], 「心理的經濟價值説の歴史的研究の一節——チュルゴーの Valeurs et monnaies の想源に就いて」, 福田徳三博士追憶論文集 (神戸高等商業學校『國民經濟雜誌』第55巻第2號), 所収。